

売上高は前期比1.2%の微増に

新製品開発、新技術など推進

——天昇電気の平成30年3月期連結決算——

天昇電気工業(本社・東京都町田市南町田、石川忠彦社長)は、このほど平成30年3月期連結(29年4月1日～30年3月31日)決算をまとめた。それによると、売上高は前期比1.2%増の155億4,800万円、営業利益は同1.4%減の12億6,100万円、経常利益は同8.8%減の11億6,000万円、当期純利益は同16.0%減の8億1,000万円と増収・減益となった。

同会計年度におけるわが国の提案等、積極的な営業活動の推進。自動車部品は、や海外経済の回復などを受けて企業収益や雇用情勢の改善が続き、個人消費や企業の設備投資に持ち直しの動きが見られるなど景気は穏やかな回復基調で推移した。

中国成形関連事業の利益はプラスに

このような状況の下、天昇電気グループは引き続き売上拡大に向け、既存顧客への更なる深耕、新規顧客の開拓、新製品の開発、新技術の提案など推進した。

同会計年度におけるわが国の提案等、積極的な営業活動の推進。自動車部品は、や海外経済の回復などを受けて企業収益や雇用情勢の改善が続き、個人消費や企業の設備投資に持ち直しの動きが見られるなど景気は穏やかな回復基調で推移した。

天昇電気がCHINAPLAS2018に出展

天昇電気工業は、4月27日(土)に上海で開催されたCHINAPLAS2018に出展した。同社の加工技術を生かしたプラスチック製品に様々な機能性とデザイン性を付加することが可能な『華飾』技術と、金型加熱技術により高光沢製品を生み出す特殊成形技術について紹介し、約2,000人が来場し、注目を集めた。

今回のCHINAPLAS2018では、海外にも拠点を持つ天昇電気が世界最有力な技術者を集めた。『華飾』技術は、天昇電気が最も力を入れて取り組んでいる技術で、加える技術だけに留まらず、『加える』という意味合いも

当金2,000万円、営業外費用に支払利息7,200万円、為替差損3,700万円を計上したこと等により、経常利益は11億6,000万円(前期比8.8%減)となった。最終損益については、特別利益に国庫補助金3億4,000万円、特別損失に固定資産圧縮損2億8,300万円を計上したこと等により、親会社株主に帰属する当期純利益は8億1,000万円(前期比16.0%減)となった。

『中国成形関連事業』は、引き続き中国におけるVOC規制の影響もあり、華飾技術は一般塗装に代わる新たな方法を求めるユーザーや、特殊成形技術は加飾せずプラスチック成形のみで高品質な製品を求めるユーザーから注目を浴び、IPF2017と比べ倍増の約2,000人が来場した。

土地から構成されている。売上高は3億6,200万円(前期比14.3%減)、セグメント利益は2億7,900万円(前期比2.3%減)となった。なお、第2四半期連結会計期間において伊賀市の主要な不動産賃貸用土地建物を売却している。

売上高は6.1%増の予測

次期の見通し

今後の経済環境は、国内の生産開始に伴い、関連資材の経費が先行する影響から増収・減益と予想している。現時点における平成31年3月期の連結業績見通しは、売上高は前期比6.1%増の165億円、営業利益は同31.8%減の8億6,000万円、経常利益は同29.3%減の8億2,000万円、親会社株主に帰属する当期純利益は同33.3%減の5億4,000万円と見込んでいる。

3次元表面華飾技術やリアルプリント技術等を活用して製品に付加価値を加える。また、特殊成形技術と合わせて、プラスチック製品に彩とともに華やかさを新たに付加価値として加え、同社が誇る開発・設計から華飾まで一貫した生産で提供している。



華飾技術をPRした天昇電気の展示ブース

当社製品「テンレイン・スクラム」キャラクター「もぐれイン君」

プラスチック業界のパイオニア

そこに最高品質の

情熱が生かされる

プラスチックの特徴を生かしきる